

# 日本における大学ゴルフ授業の実施状況に関する調査研究

## An Explorational Study of the Circumstances of Golf Sessions at Universities in Japan

三幣 晴三・光永 吉輝・竹田 幸夫

### はじめに

本研究は、平成 20 年度における全国の大学における一般体育としての「ゴルフ授業」の実態を把握する目的で実施した「全国的な調査」の結果を報告するものである。調査にあたっては「全国大学ゴルフ指導者研究会」に協力をいただいたことを付記しておく。

さて、大学におけるゴルフ授業は一般体育の中でどのように位置づけられてきたのかを過去の実態から見ておかなければならないであろう。大学教育における一般体育はそもそも「必修」として位置づけられてきたが「大学改革」によって、各大学は「必修」から「選択」あるいは「選択必修」に変更するなどの何らかの変更を余儀なくされているのが現状であろう。

一方、「ゴルフ」は日本においてはバブル経済の中で翻弄され会員権の高騰など体育教育とは全く縁のないもの、あるいはゴルフは健全なスポーツとは縁遠いものとされ体育教員からあるいは大学関係者からもゴルフについてのさまざまな偏見が長い間続いたと言えよう。

世界におけるゴルフの実態は、日本の現状とは異なりイギリスに発祥したスポーツゴルフは着実にその地歩を固めてきてさまざまなスポーツの中でも特筆すべき発展を遂げてきている。それはゴルフのすばらしさが多くの人の共感を呼び、見るスポーツとしても、やるスポーツとしてもワールドスポーツとして認められてきたものと言えよう。その背景にはタイガー・ウッズの台頭など特筆すべきではあるが、ゴルフがアジア・アフリカ・中南米など全世界的な国々からも次々に好選手が誕生

している現状も無視できないであろう。先般、オリンピックの新しい種目として「ゴルフ」が認知され IOC 国際オリンピック委員会は 2016 年オリンピックから採用に踏み切ったことはゴルフの新しい発展の証左であろう。この背景にはゴルフの国際的な人気もさることながら、ゴルフの持つ独特な要素も無視することができないであろう。それは他のスポーツと異なるルールやエチケット・マナーの特殊性である。審判が自分自身であること、エチケットやマナーがゴルフプレイの中に含まれていることなど人間や人生にとっての大きな意義そして長いゴルフ人生も保障され生涯スポーツとしても大きな意義があることなどゴルフの意義は枚挙に暇がないほどである。

さてこのような背景の中で、日本の大学におけるゴルフ授業がどのように位置づけられているのであろうか。本研究は現状の把握を主眼としているが、同時に将来のゴルフ授業はいかにあるべきかを探る目的をもっているものである。調査研究の結果は、われわれの予想を超えるものであり、同時にゴルフ授業の開講によってこれまでの大学体育をさらに発展させる可能性があることも示唆しているものである。

## I. 調査大学数について

**調査大学数 312 大学 (国立大学のほぼすべて + 私立大学)**

**回答大学数 161 大学 (51, 60%= 回収率)**

上記調査大学数については、全国の主要大学 312 大学を選出して郵送により調査した。回答数 161 の数は 50 パーセントを超えており、まずまずの回収数と思われる。したがって、本調査研究としては十分に全国的な傾向等を把握できる数であると判断できるものである。

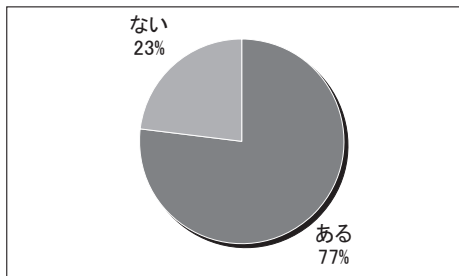
以下、調査結果ならびに各項目ごとに考察をくわえるものとする。

## II. 調査結果と考察

設問1. これまで、一般体育でゴルフを実施したことがありますか（ある・ない）

回答数 161

実施したことがある  
124 (77.02%)  
実施したことがない  
37 (22.98%)

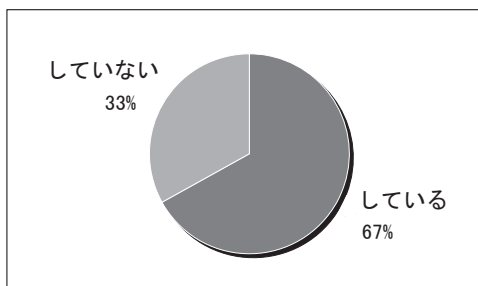


考察：ゴルフ授業を実施した大学数が77パーセントを超えているのは、予想を超える数値である。一般体育で実施される種目数は多岐にわたるがその中で、最近の傾向では軽スポーツ特に球技関係が多く見られるが、施設や用具などゴルフ授業にとっては不利な条件がある中で77パーセントを超える結果は大学体育でのゴルフ授業の価値が体育教員によって認められていることを物語っているものと理解できるであろう。

設問2. 現在、一般体育でゴルフを実施していますか（ある・ない）

回答数 161

実施している  
108 (67.08%)  
実施していない  
53 (32.92%)



考察：現在の実施状況がこの項目であるが、67パーセントという数値はかなり高いものである。勿論これまで実施したことがある大学数が77パーセント

であるので、ここから 10 パーセントダウンしているのは、なぜであろうか？  
すでにゴルフを取り入れながら、何らかの事情でやむを得ず中止したのであ  
ろうが、その理由はこの回答だけでは読み取ることができない。ゴルフ授業  
の安心・安全・十分な実施は現在の大学施設ではかなり困難であることが予  
想されるよう。しかし、そのような困難な状況であるにも拘わらず、約 70 パー  
セントの大学が現在実施していることは、むしろ驚異的である。

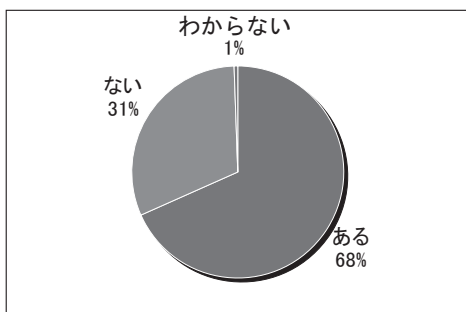
### 設問 3. 将来、一般体育でゴルフを開講する可能性はありますか（ある・ない）

回答数 161

可能性はある 110 (68.32%)

可能性はない 50 (31.06%)

わからない 1 (0.62%)



**考察:** 将来の実施可能性についての設問である。設問 1 でこれまでの実施が 77 パーセント、設問 2 で現在の実施が 67 パーセントという調査結果を考えると、将来の実施可能性が 68 パーセントというのはかなり低いと言わざるを得ない。この理由は何かについては、もう少し突っ込んだ設問が必要であろうが、いざ実施したけれども、あるいは今後実施するにしてもかなりそのハードルが高いという何らかの理由が想像される。それは、学内の意思疎通の問題や実施する場合の安全面・経済面（予算面）などであろうが、ゴルフ授業が本来の意味で学内で実施する無理な一面があることが予想される。アメリカなど欧米では大学がゴルフ場を持っていることが多いが日本ではほとんどないのが現状であろう。将来の可能性を何らかの策を練ることで打開することが出来ないかは、ゴルフの普及にとっては緊急の課題であろう。実際にさまざまな困難を乗り越えながら大学体育実技にゴルフを位置づけている大学が多いのも事実である。

## 日本における大学ゴルフ授業の実施状況に関する調査研究

また、体育教員がゴルフ授業を一般体育に位置づけることに、ある種の諦めを持っていることも想像されるが、今回のこの調査によって全国の大学ゴルフ授業がかなり一般的になっている事実を知ることによって、このような諦めからの脱却を志す教員が増える可能性も期待できよう。

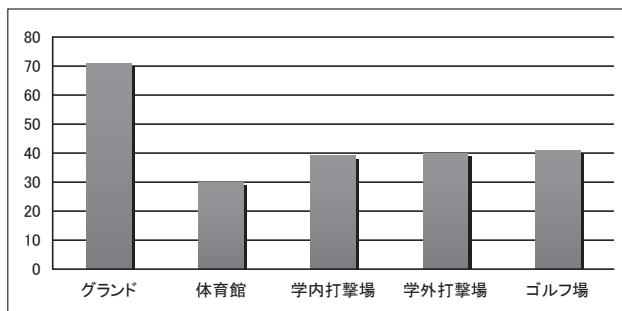
上記設問 1.2.3 でいずれも「ない」と回答した大学は以下の設問は無回答とした  
上記設問 1.2 でどちらかで「ある」と回答した大学は以下の調査を実施した

### 設問①ゴルフ授業の場所

(グラウンド・体育館・学内の打撃場・学外の打撃場・ゴルフ場＝ショートコースを含む) 複数回答

回答数 122 大学

グラウンド	71 (58.20%)	体育館	30 (24.59%)
学内の打撃場	39 (31.97%)	学外の打撃場	40 (32.79%)
ゴルフ場＝ショートコースを含む	41 (33.61%)		



(注) 「複数回答」

考察：調査結果は予想通りという印象のグラウンド使用 71 パーセント、体育館使用 30 パーセントとともに、学内の打撃場が 32 パーセントを占めているのはおよそ 3 校に 1 校が学内に打撃場を持っていることを示していて予想を超える数値と言えよう。また、学外の打撃場についても 33 パーセントを占めていて、これも予想を超える数値であろう。この数値は同時に、学内でのゴルフ指導

が学内施設では不十分なことを示しているとも言えよう。おそらく、学外の打撃場というのは民間のゴルフ練習場のことを指していると思われるので、ここでも十分なゴルフ指導にはある程度の費用がかかることも読み取れよう。

上記の打撃練習とともに、各大学の約3分の1がゴルフ場（ショートコースを含む）を使用しているが、この数値も驚くべき数値である。民間のゴルフ場の使用はゴルフの魅力を体験するためには不可欠であると思われるが、各指導者が多少の費用がかかってでも、学生に体験させることを優先させているのであろう。

## 設問②ゴルフ授業への学生の興味

(非常にある・比較的事ある・どちらとも言えない・比較的事ない・全くない)

回答数 123

非常にある 31 (25.20%)

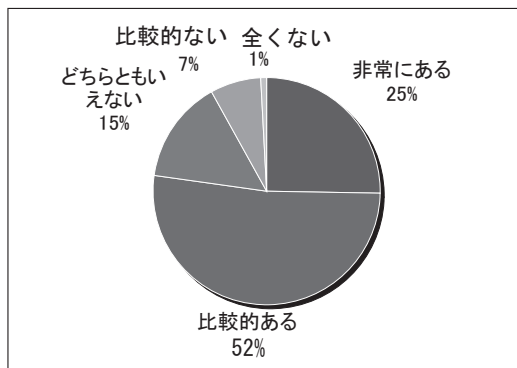
比較的事ある 64 (52.03%)

どちらとも言えない  
18 (14.63%)

比較的事ない 9 (7.32%)

全くない 1 (0.81%)

\*「非常にある」「比較的事ある」の合計  
95 (77.24%)

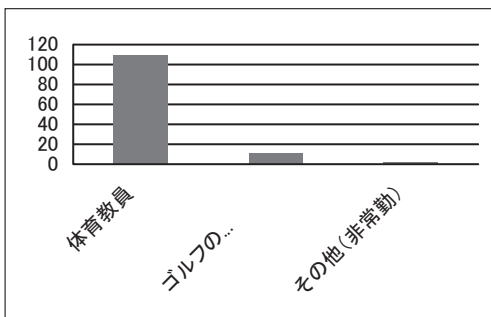


考察：これは教員側からの印象としての学生のゴルフに対する興味である。これによると、学生は概して興味を強く持っているようである。それは、非常にあると比較的事あるの合計が77パーセントを占めていて、比較的事ないと全くないの合計が10パーセントにとどまっているのを見ても圧倒的に学生の興味はある、と断定することができる。おそらくどの大学でも完全に素晴らしい施設を持っているわけではないことを考慮すればその中で各教員が工夫を凝らしてゴルフ授業の楽しさを体験させているのであろう。

設問③ゴルフ指導者はだれですか（体育教員・ゴルフの専門指導員・その他＝ ）

回答数 121

体育教員	109 (90.08%)
ゴルフの専門指導員	
	11 (9.09%)
その他（非常勤）	
	2 (1.65%)



(注) 複数回答

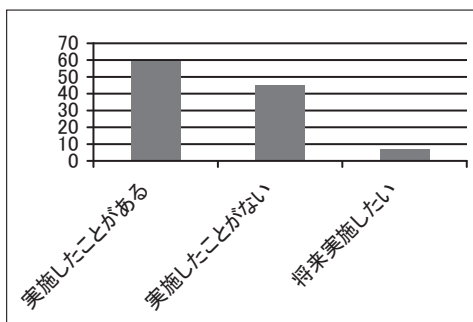
考察：調査結果は概して予想通りの結果である。体育教員が 90 パーセント以上を占めているのは当然といえば当然であるが、ゴルフの専門指導員が 9 パーセントを占めているのは、一方で体育教員だけでは十分ではないことを同時に示しているとも言えよう。

設問④学外でのゴルフ実習<集中授業・シーズンコースなどを含む>について

(実施したことがある・ない・将来実施したい)

回答数 111

実施したことがある	59 (53.15%)
実施したことがない	45 (40.54%)
将来実施したい	7 (6.31%)



考察：学外でのゴルフ実習の実施は、ゴルフの種目特性としても必要不可欠のものであろうが、種々の条件を考えれば大学での一般体育としてはかなり実施が

困難であろうと思われる。しかし、それにも拘わらず各大学では学生が体験することの重要性を考えて実施に踏み切っているものと理解することがまずは大切であろう。したがって実施している大学数が53パーセントと5割を超えているのは、今後のゴルフ授業の展開にとっても、また全国の大学体育に対しても大きな反響を呼ぶことになるだろう。実施したことがない、の40パーセントも将来実施したい、の6パーセントもともにこの結果によってなんらかの工夫をして実施に踏み切る可能性があるものと理解できよう。

### 設問⑤ゴルフのルール・マナーの講義について

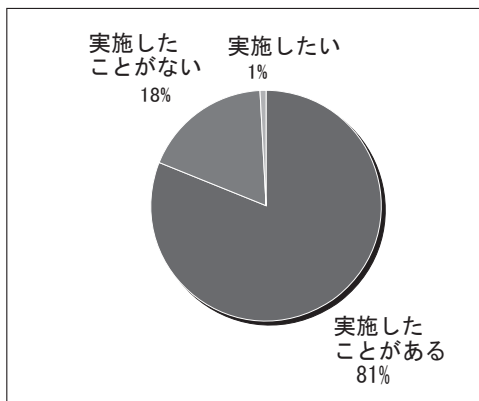
(実施したことがある・ない・将来実施したい)

回答数 117

実施したことがある  
95 (81.20%)

実施したことがない  
21 (17.95%)

将来実施したい  
1 (0.85%)



考察：エチケット・マナー・ルールの指導は、ゴルフ授業にとって非常に大切な内容である。他の種目と比較して独特な内容をもっているため、この指導は欠かすことが出来ないものであるが、実施した大学数が95大学<81パーセント>は指導者がこの学習の意味を理解していることを示しているものと言えよう。しかし、実施していない大学も21大学<18パーセント>あり、この調査結果はそれらの大学に対して大きな影響を与えるものでもあろう。



設問⑥一般体育でのゴルフ授業は価値があると思いますか

(大いにある・比較的ある・どちらとも言えない・比較的不い・全くない)

回答数 115

大いにある 46 (40.00%)

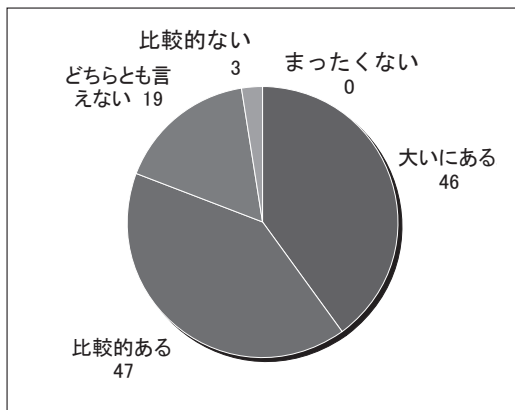
比較的ある 47 (40.87%)

どちらとも言えない  
19 (16.52%)

比較的不い 3 (2.61%)

全くない 0 (0%)

※「大いにある」+「比較的ある」  
=93 (80.87%)



\*上記で「大いにある・比較的ある」と回答した大学に、その価値はどのような価値ですか？

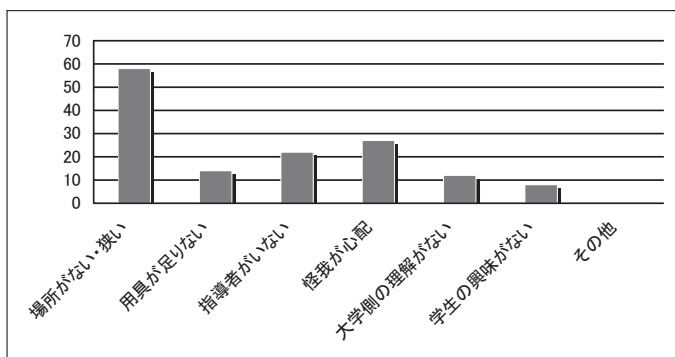
生涯スポーツとして適し定着する可能性大	50
ルール・マナー・エチケットの学習は大変プラスになる	33
社会性・協調・人間関係・配慮・立ち居振る舞いが身につく	31
将来社会人として行う機会があるため	20
審判が自分であること /noblesse o.blige・フェアプレイ・自己責任	11
身体運動感覚・技術取得・自己向上・集中力	11
とりつき易い・高校まで体験できない・ニーズに叶う・導入教育として意味がある	8
メンタルマネージメント・コースの攻略・心技体・感情のコントロールとして	6
自然との触れ合い	5
ストレス解消・爽快感・楽しさ	4
ゴルフの文化財的価値・存在意義を体験する	4
老若男女が一緒に楽しめる	3
ハンディキャップにより楽しめる	2
親子での会話・ゴルフ中継を見るなど副次的効果	2

\*上記は回答数 2 以上の回答を示した。回答数 1 は省略した。

考察：この調査項目で注目すべきは、大いにある・比較的あるの合計が 93 大学 <80 パーセント>もあるということで、指導している教員も指導していく中でゴルフ授業の価値を感じ取っていることを示しているといえよう。比較的不是が僅かに 3 大学、全くないは 0 大学であり、ほとんどの大学の指導者はゴルフ授業の価値を認めているものと理解できる。そのゴルフ授業の価値は、どの点にあるかという間については、圧倒的に「生涯スポーツ」としての価値が飛びぬけている。また、続いてルール・エチケット・マナーであり、これに関連して「社会性」が続いているのは予想できることであろう。「将来の社会人として行う」可能性については一方で「生涯スポーツ」としての位置づけに近いと理解できよう。これらの回答項目は互いに連結しているので、単純に各項目の数値について考察するのは必ずしも適切ではないといえよう。

設問⑦ゴルフ授業での問題点は何ですか（場所がない・用具が足りない・指導者がいない・怪我が心配・大学側の理解がない・学生の興味が無い・その他）

回答数 123	場所がない・狭い	58 (47.15%)	怪我が心配	27 (21.95%)
	指導者がいない	22 (17.89%)	用具がたりない	14 (11.38%)
	大学側の理解がない	12 (9.76%)	学生の興味が無い	8 (6.50%)
	その他	0 (0%)		



(注) 「複数回答」

考察：場所がない、が圧倒的である。ゴルフはゴルフ場で実施するものであるのは明らかである。大学内では当然のことながらゴルフ場に匹敵する場所の確保は不可能である。その意味で、ゴルフ授業では場所がない・狭いが問題点の1位にあるのは当然であろう。この点に関しては、各大学では狭いグラウンドで正式のゴルフボールが使えない状況で穴あきボールや飛ばないボールなどで苦勞して授業を展開している様子が垣間見られるであろう。

次に問題点として指摘されているのは、怪我の心配である。スイング中の事故やボールによる怪我はよく聞くところであるが、その防止策の決定的なものがなかなか見つからないので指導者も苦勞するところであろう。クラブが飛んでいかないような工夫やゴルフグローブの装着の義務付け、打撃練習での位置どり、などそれぞれ工夫がなされているが、怪我の防止策は各大学間でのノウハウを提供し合って安全教育に徹底的に取り組むことが必要であろう。大きな怪我が発生することでゴルフ授業が決定的なダメージを蒙ることになることを考えれば重大な課題である。

次の問題点は、指導者である。体育教員が圧倒的な指導者であることを考えると、その体育教員自身がそれぞれ程度の差はあるとはいえ、ゴルフ指導にあまり自信が持てない実態も浮き彫りになろう。ゴルフは非常に奥の深い技術をもつスポーツであることを考えると体育教員の中でゴルフを自信を持って指導できる教員は非常に少ないと言えよう。各教員間での技術的な理解のコミュニケーションが圧倒的に不足していることも指摘できよう。その意味で、ゴルフ研修会の実施によって全国の大学ゴルフ指導者の指導力をアップさせる施策も必要であろう。

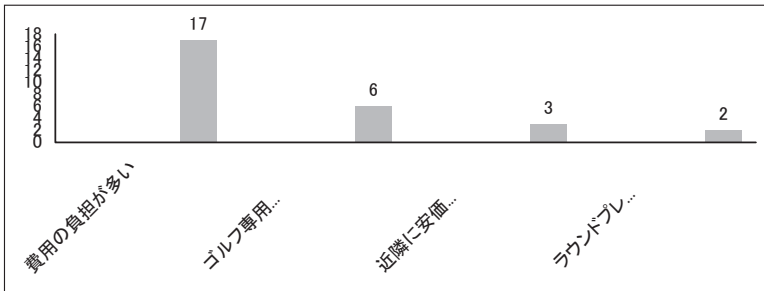
次に用具が不足が続いているが、各大学での予算としてゴルフ授業はクラブ、ボール、マットなど多くの用具を必要としているため各教員が頭を痛めているのが実情であろう。これについてはゴルフ用具が新品の場合かなりの予算を必要としているが、大学によっては中古の品を買うことで予算削減を図るなど克服するためのノウハウはあるとも考えられる。これも各大学のコミュニケーションが必要であろう。

大学側の理解については、約10パーセントの数値が出ているが、この数

値は以外に少ないと考えてよいであろう。おそらく数年前ごろでは、この数値はもっと高かったのではないかと予想される。現在ではゴルフについてのさまざまな偏見はかなり取り除かれているのがこの数値を見ても読み取ることが出来よう。しかし、それでも10パーセントの大学が依然としてゴルフについての理解が薄いことが考えられるが、だからこそ今回の調査が必要であったとも指摘できよう。

### その他の指摘された問題点

費用の負担が多い（大学・学生も含めて）	17
ゴルフ専用練習施設がない・遠い	6
近隣に安価な施設がなくバスの調達など困難	3
ラウンドプレイまでの継続的な時間と費用が不足	2



(注) 回答数 2以上のみ

### ◎回答数1の紹介

芝生のパター練習不足・運動量が確保できない・シャンクボールが打席にあたり恐怖を感じることもある・ラウンド授業の指導・移動手段・興味を持つ学生の絶対数が不足・実習の日程調整困難・学外実施のため次の授業への移動が困難・経験者と未経験者との落差による困難・コースでの指導補助員が不足・雨天時の授業対策・学内の授業での目標設定が困難・コースを回れない学生が多い・教える側の技術的問題・コースの確保が困難

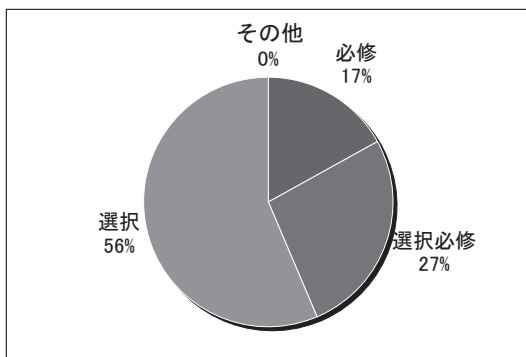
考察：その他の指摘され問題点には上記のようにさまざまなものがあるが、これらは回答数1のものであろうとも非常に重要な指摘も含まれている。同時に指導者の悩みでもあり、これらについて指導者間のコミュニケーションが必要であろう。

### 設問⑧ゴルフ授業の科目種類は何ですか

(必修・選択・選択必修・その他) <広域での卒業所要単位など具体的に記入>

回答数 114

必修	21(18.42%)
選択必修	33 (28.95%)
選択	70 (61.40%)
その他	0 (0%)



※必修と選択の合計 =54 (47.37%)

考察：必修と選択必修を加えると、およそ47パーセントになり約半数である。予想通り選択が圧倒的に多く、約60パーセントを占めている。これらの合計は100パーセントにはならないが、これは回答の中に大学の授業形態が複雑であるため複数の回答が含まれているためである。しかし、必修と選択必修の合計が約半数であるのは体育実技の全国的な形態が必ずしも選択だけになってはいないことを示している。今後大学一般体育実技がどのように位置づけられるかは各大学内で議論が分かれるものであろうが、本調査結果はゴルフ授業の意味がかなり高く評価されていることを示しているものと言えよう。

### \* その他のコメントの紹介

\*以下のコメント数はグラフにする必要性がないため紹介のみに留める

卒業所要単位にカウント	10
学部・学科により形態が異なる	9

必修と選択ともにある	6
3年間(2-4年)で5回・5単位取れる、さらに通年コマのほか集中も実施	1
シーズン2単位	1
一般体育3単位の内の1つ	1
シーズンとして実施したが参加者少なく中断	1
1年生次に加えて上級生にも半期ゴルフ提供	1
16単位まで専門選択と置き換え可能	1
ゴルフゼミ1-4年(卒業所要単位)	1
基礎・応用と分けることでともに単位認定	1

考察：上記のコメントは必ずしも全員によるものではないので、それぞれの考察は行わないが、それぞれ意味のあるコメントであり、各大学間での検討が望まれる。

設問⑨ゴルフ授業の目的は、何だと思えますか？〈複数回答〉

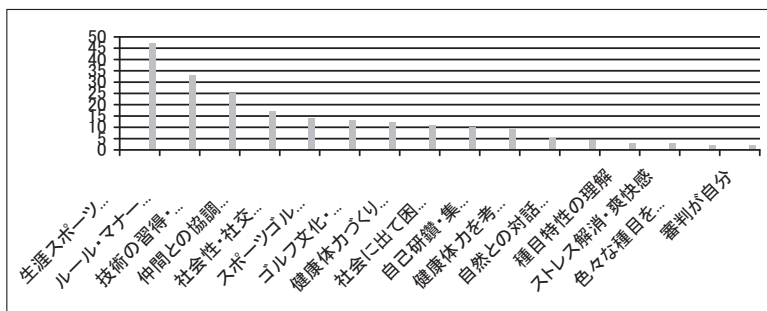
生涯スポーツ・生活化の一つとして	47
ルール・マナー・エチケットの学習	33
技術の習得・基本スイングの構築	25
仲間との協調・相手への配慮・マネージメント能力・コミュニケーション能力	17
社会性・社交上の友好・礼儀作法・親切心・おおらかさに役立つ	14
スポーツゴルフに親しむこと・きっかけ・人気スポーツの体験	13
ゴルフ文化・歴史の理解・継承・発展・基礎的知識の取得・イギリススポーツの原点	12
健康体力づくり・心身の発達・運動機会のため	11
社会に出て困らないように	10
自己研鑽・集中力・人間形成・人間教育・欲望に打ち勝つ心	9
健康体力を考えるキッカケに有効	5
自然との対話・偶然と必然の妙を学ぶ	4
種目特性の理解	3
ストレス解消・爽快感	3

色々な種目を経験させる

2

審判が自分

2



(注) 回答数 2以上のみ

考察：複数回答を容認しているため、各項目は互いに入り混じっていてこれらを一一つ一つ検討するのはあまり妥当とは言えない。しかしながら、複数回答のトップは「生涯スポーツ」であり、これは揺るがない目的と言えよう。そして次に続くのは予想通り「ルール・マナー・エチケット」でありゴルフ授業での大きな柱と位置づけているのも妥当であろう。技術と基本スイングは、ゴルフの目に見える課題であり、特に打席でのスイングは授業のメインに位置づけられていることが多いので3番目に位置付けられているのであろう。4番目と5番目は微妙に関連している項目であり、両者を併せるとかなり高い数値となっている。社会性やコミュニケーション能力はゴルフプレイでの大きな内容であり、理解できる場所である。

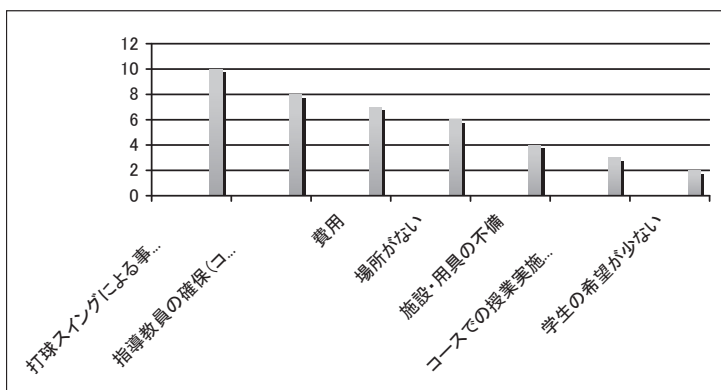
### ◎回答数1の紹介

ハンディキャップ制の理解<他にも利用可>・最終的にミニコースを回せたい  
 ・異世代間の交流・この年代に覚えることが重要・最終的にコースを回れる・  
 スポーツ科学の教育に資する・紳士を育てる・小中高では経験しにくい・目標  
 設定・心技体のバランス

上記3. <将来、一般体育でゴルフを開講する可能性がある・ない>で（ある）と回答した大学への質問です

設問①ゴルフを開講することへの障害または不安は何ですか<複数回答>

打球スイングによる事故・安全面	10
指導教員の確保（コース指導も含む）	8
費用	7
場所がない	6
施設・用具の不備	4
コースでの授業実施が困難（費用・場所）	3
学生の希望が少ない	2



(注) 回答数 2以上のみ

考察：この設問は、特に将来の開講に関する障害や不安について問うものである。現在の障害や不安についてはすでに回答されているので、現在開講してなくて将来開講する可能性がある大学が、どのような障害や不安を感じているのかを調査する目的で行ったものである。そのような観点でこの項目の回答を見てみると、圧倒的に事故や安全面がトップで、次に指導者の確保、費用、場所がない、と続いている。現在開講している大学でも、おそらく上記の障害や不安を感じながら実施しているのが実情であろう。将来開講する可能性がある大学に対して、以上の項目に対する防御策を各大学ではどのように回



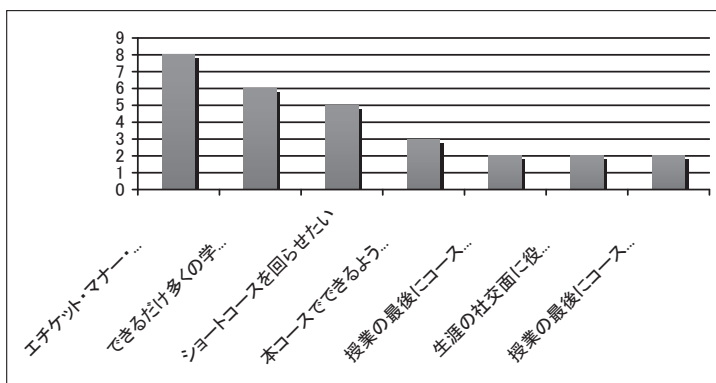
避しているのかの情報を交換していく努力も要請されよう。

◎回答数1の紹介

学内の練習場の新設・生徒数に対して教員が足りない・芝生での練習が困難・コースがとりにくい・学外打撃場への交通による事故・アシスタントが必要・指導者がいない・以前あった学外の打撃場閉鎖・技術取得の困難さ・全体のプレイの理解が困難・練習場の管理に手間がかかる

設問②どのようなゴルフ授業を展開したいですか

エチケット・マナー・ルールの重視	8
できるだけ多くの学生にコース体験をさせたい	6
ショートコースを回せたい	5
本コースでできるようなゴルファーの育成	3
授業の最後にコースに出したい	2
生涯の社交面に役立つ授業	2



(注) 回答数 2以上のみ

考察：この設問への回答は、全員ではなく回答数はかなり少ない。したがって回答項目を一つ一つ検討する意味はあまりない。しかし、これらの回答からゴルフ授業を展開する上で重視したい内容はある程度認識することはできよう。それによると、トップはエチケット・マナー・ルールであり、それに続いて

2番3番4番5番ともにゴルフコースへの体験が続いていて、これを合算すると、合計で16となり、トップになるほどである。指導者たちが、如何に学生に対してゴルフプレイの体験をさせたいか、気を配っていることが読み取れる。しかし、逆説的に言うならばゴルフコースの体験学習が如何に大変であり、困難であり、予算や事故防止など不安要素があって実現が難しいかを示していると言えよう。

### ◎回答数1の紹介

現在集中授業だが通年の授業として行いたい・実際のゴルフに近いゲームをさせたい・基本スイングの最低限の習得・安全な授業・本格的なコースでは出来ないでゴルフもどきになる・専門的な技能を持った指導者を非常勤で採用したい・ゴルフ文化の継承・自然の素晴らしさをコースで体験・生涯スポーツに繋ぐ・技術とプレイとを並行的にやり実践を多くしたい・合宿が現在2泊3日を4-5日にしたい・あまり費用がかからないで受講させたい・ゴルフスイング習得の方法を開発して生涯ゴルフに親しむキッカケ・定期的な実践・運動習慣を身につける・何度かコースを回らせたい・40人程度を10人のスタッフでコースを・多くの学生が参加する授業

## 結 論

おそらく本格的な大学ゴルフ授業の全国調査は、今回が初めてであろう。その意味で大学体育に対して大きな意味を投げかけているものと理解できよう。

この調査によって明らかになった事項を最後にまとめておくこととする。

1. ゴルフ授業の過去および現在の実施大学数が77%にのぼった。これはある意味で驚異的な数値である。現在の実施状況は67%であり、かつ将来実施する可能性の大学は68%であり、大学体育の種目としてはかなり高いと言える。
2. ゴルフ授業の場所については圧倒的にグラウンド使用が71%と多いが、それとともに学内打撃場・学 外打撃場・ゴルフ場の各3項目も約30%以上を占めているのは驚異的である。
3. 学生のゴルフに関する興味については、非常にある・比較的あるの合計がなん

と 77% を占めている。満足な場所・施設が完備されていない状況の中でのこの数値はゴルフの持つ魅力が一般的になっていることを示しているものと言えよう。背景にはタイガー・ウッズや石川遼などの活躍も一翼を担っているものであろう。

4. ゴルフ指導者は圧倒的に体育教員である。これは体育教員がゴルフに如何に興味をもち、またその価値を感じ取っているかを示している。また同時に体育教員だけでは不安な一面も感じ取ることができよう。
5. 学外のゴルフ授業の実施については、シーズンコースや集中授業などの形態が考えられるが、これを実施するかどうかは学生にとってはグラウンドでのゴルフスイングの習得だけのゴルフから本来の意味でのゴルフ体験ができるかどうかという決定的な違いがあろう。まだ実施していない大学に対して調査結果は大きな影響を与えているものと理解できよう。
6. エチケット・マナー・ルールの講義形態またはプレイ実施上での指導はゴルフ本来の持つ素晴らしい価値の指導である。これを実施している大学は 81% に上るが、この数値は当然と言えば当然であろう。しかし、まだ実施していない大学が 18% にのぼるのは、むしろ問題である。この調査結果によってこれらの大学に指導することの重要性を喚起することにつながれば本調査が意味をもつことになるだろう。
7. ゴルフ授業の価値については、大いにある・比較的あるの合計が 80% を超えている。各指導者がゴルフの価値を感じ取っているものと理解されよう。また、その理由については圧倒的に「生涯スポーツ」としての価値、さらに「エチケット・マナー・ルール」が続き、さらに「社会性」が続く。
8. ゴルフ授業の問題点は、圧倒的に場所がないが多い。さらに怪我の心配、指導者がいない、用具が足りない、大学側の理解がないと続くが、これは予想の範囲内であろう。その他、学生の費用も重要な指摘であろう。指導者の工夫によって上記の問題点のいくつかは解決できる可能性もあるが、同時に本調査結果が各大学に明らかになることで、解決できる可能性も期待できよう。
9. ゴルフ授業の単位の種類については、ゴルフだけではなく、体育全般の単位について解答されているものであろう。必修・選択必修の合計が 47% にのぼり、

約半数を占めているのは予想以上であろう。大学改革によって選択にならざるを得ない大学が多くなり、場合によっては廃止された大学もある中で、大学体育教員が真剣に学生の体育活動の意義を守ろうとして学内外での活動をしているのであろう。本調査がゴルフ授業の価値を喚起する大きな意義をもつとしたらこれ以上の喜びはない。

最後に、本調査に協力いただいた全国の大学体育教員の方々に深甚なるお礼を申し上げます。